

大阪の都市景観の変遷を探る

うちだ よしち
内田 吉哉
民博 機関研究員



大阪市内を探検してみました

古い写真と現在の景観を比較する筆者。
場所は本町橋（大阪市中央区）

都市の景観は目まぐるしく変化する。古い建物がなくなったり、新しいビルが建てられたり、その変化に驚くことも多い。しかし今でも、古い資料を手がかりにしてみかしの名残を探り出すことは可能である。古写真を片手に、大阪の街を歩いてみた。



仕事に携わるようになってからである。母校で研究員として、昭和初期から中期にかけての大阪を撮影した写真資料の調査を担当することになり、そこで写真に映るかつての大阪の光景に目を奪われた。一九五〇〜一九六〇年代の大阪の写真では、近世に開削された堀川がまだ市内に残されており、たしかに「水の都」の景観が広がっていたのだ。

写真資料の調査を進めるなかで痛感したのは、交通量の増加と建築物の高層化が景観におよぼす影響の大きさである。交通量の増加が幹線道路の拡張と高速道路の建設を必要とし、そのために堀川が埋め立てられた。また、建築物の高層化による眺望の遮断が、都市のなかにある「名所」を変化させてしまった事例も多い。

こうした変化の多くは、一九六〇〜七〇年代のいわゆる高度経済成長期に起こった。高度経済成長期は、日本における都市景観の大変革期なのである。

街なかに残る「へんな場所」を探る

写真資料をもとに、実際に大阪の街なかを調査してみると、かつての堀川の名残と、新しく建設された高速道路が混在する光景を見ることができ。阪神高速道路の環状線や守口線の上をとおっている。高速道路沿いに歩くと、道の真中に突然橋の欄干だけが立っていたり、なかには橋そのものが平地にポツンと残り残されていたりする。完全に堀川の痕跡が残っていないようなケースで



雑喉場（ざごば）橋の記念碑だけが残されている場所も（大阪市西区江之子島）

みんなは、世界をまたにかけて活躍する人類学者が集まる研究施設だが、そのなかにあってわたしの研究対象となるフィールドは、非常に「ごちんまり」としている。

わたしが現在とり組んでいる研究テーマのひとつに、絵画や写真資料を活用した都市景観の変遷史研究がある。ところが、目下研究対象にしている地域が、国立民族学博物館の所在地たる「大阪」なのである。調査に出かけるといってもバスポートもビザも必要なく、地下鉄や私鉄でほんの数十分、あとは徒歩で用が足りてしまう。

それでは、わたしは大阪の街なかを歩いて何をしているのか。わたしは、古い写真や絵画を手掛かりにして、過去の大阪の痕跡を探ってまわっているのである。



堀川の跡に夫婦橋の欄干だけが残る（大阪市北区天神橋4丁目）

なぜか五〇年前の大変革期

わたしが大阪に住むようになったのは、大学に入学してからである。ときはすでに平成、バブル景気も弾け終わって都市の開発も一段落したころだった。大学では歴史学を学んでいたのだが、大阪の地域史に関する本を読んだり授業を聞いたりするたび、大阪が「水の都」と表現されることに違和感があった。田舎から出てきたわたしの目に映る大阪は、どこまでも現代的な大都会でしかなく、その印象を構成する景観は、主として高層建築と高速道路の高架、そして市内を縦横に走る地下鉄網だった。

その印象が一変したのは、大学院を修了して大阪の文化遺産研究の



〈上〉明治時代の絵葉書「(大阪名勝) 高津神社ヨリ市街ヲ望ム」(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)
〈下〉現在の高津宮からの景観。建築物の高層化により視界は数十メートル (大阪市中央区高津)

も、橋があった地点に記念碑や解説板が設置されていることもある。

また、建築物の高層化がまねいた都市景観の変容のわかりやすい例として、高津宮からの眺望の変化がある。高津宮は、仁徳天皇が民家を見下ろし、炊飯の煙が少なくなることから民衆の窮乏を察したという伝承の残る場所である。高津宮のある地域は上町台地とよばれ、平坦な地形の大阪では唯一の高地であった。高津宮の海抜は約一三メートルにすぎないが、大阪駅付近で約〇・五メートル、海に近いUSJ付近では海抜〇メートル以下の場所もあることからすれば、いかに「高地」であるかが察せられよう。高津宮からの眺めは伝統のある大阪名所のひとつだったが、現在では高層建築に遮られている。

景観の変化を一例として、高度経済成長期は日本の文化史上、きわめて大きな画期であったのだが、この時代を歴史学の問題としてとらえた研究は少ない。競争相手のいない宝の山を見つけた気分、わたしは今日も大阪の街を探検している。